

ジョナサン・A・シルク著

チベット語訳『般若心経』2系統校訂テキスト

川 崎 信 定

本論文は、チベット語訳大蔵経カンギュル（仏説部）に存する『般若心経』のA・B2つのテキスト系譜（recensions）に関する丹念で精密な文献研究であり、序論・諸版情報・2系統校訂テキスト・付録（『梵藏漢蒙滿語合璧版般若心経』注記・ヨーロッパにおけるチベット語訳『心経』印刷刊行史・能海寛備忘・帰敬偈考察・チベット字テキストと英訳ほか）・文献目録の全体で205ページからなる。

近年ヘルムート・アイマー（Helmut Eimer: *Rab Tu 'Byuñ Ba'i Gzi*, 2 vols, *Asiatische Forschungen* 82, Wiesbaden, 1983, id.: “A Note on the History of the Tibetan Kanjur”, *Central Asiatic Journal* 32/1-2, the Hague, 1988, pp. 64-72. 他）やポール・ハリソン（Paul Harrison: “*Drumakinnara-rāja-paripṛcchā-sūtra*, A Critical Edition of the Tibetan Text (Recension A)”, *Studia Philologica Buddhica, Monograph Series* VII, Tokyo, 1992. 他）によって明らかにされてきているように、現存するチベット語訳大蔵経カンギュルは、14世紀はじめにウパロセル他によって蒐集・整理されたいわゆる古ナルタン本を基にして、西のテンパンマ（Them spangs ma）系と東のツェルパ（Tshal pa）系との2系統に分かれて伝承・保持されてきた。すなわち、古ナルタン本から書写されてギャンツェに保存されていた写本がテンパンマ系と呼ばれる西系統カンギュルの基盤となり、これはその後第5世ダライラマの治世下のチベット国内やモンゴルで何度か書写された。河口慧海によって日本に将来されて東洋文庫に所蔵されているバルコル・チョデ（白居寺）写本（著者の略号ではM、以下同じ）や、ラダツクのレーのトク宮殿保管の Stog Palace Kanjur（R）などがこの系統の写本とされる。また同じく古ナルタン本を継承しながらこの西系には別にシェルカルゾン系のカンギュルがあり、これを受け継ぐ写本として大英博物館所蔵のロンドン写本（L）、木刻開版された形ではナルタン新版（N）、ラサ版（H）がある。以上が西系統カンギュルに属するとされる。他方、東のツェ

ルバ系では大学者ブトンによる改訂を経て、その後に木刻開版されたジャムサタン（裏塘）版（J）、チョーネ（祐寧寺）版（C）、ペキン版（P）、デルゲ版（D）、さらにはウルガ（庫倫）版（U）、写本ではベルリン写本（B）、台北写本（F）などがあり、以上が東系統カンギュルとされる。

本論文の著者イェール大学宗教学科助教授ジョナサン・A・シルクはチベット語訳『般若心経』のテキスト校訂を試みるにあたって、現在において入手可能と考えられるあらゆるカンギュル版本と写本・リプリント版における該当箇所を長い年月にわたる一貫した努力によってコピー蒐集した。その数は13種、43点にのぼり、この内には上述の木刻開版本や写本で現存が知られているものすべてが含まれ、ベルリン写本（B）、ロンドン写本（L）、ハーヴァード燕京研究所所蔵のペキン永楽版（K）、Phug brag 写本（S）など入手に困難を伴うものも多い。

『般若心経』はきわめて短い文献であることから数量的に統計学的サンプルとしてはほとんど意味をなさないと思なされがちである。しかしチベット語訳『般若心経』の諸版におけるヴァリエント（異本・異読）の今回の検討結果においても、H. Eimer および P. Harrison の研究によって解明されつつある諸カンギュルの間の親縁・影響関係を示す上述の東西2系統の存在は明確に再確認できる。以上に加えてチベット語訳『般若心経』においては、その伝持・伝承の系統は一段と複雑である。複雑化の原因は、チベット語訳『般若心経』がその「密教部」と「般若部」の両部にそれぞれ存在するカンギュル（H; L; M; N; R）、「密教部」だけに有するカンギュル（B; C; F; J; K; P）、「密教部」と同じものを転写して「般若部」にも入蔵したカンギュル（D; U）があり、それぞれの入蔵された「部」内での伝持のされ方で上述の東西2系統に加えて伝承関係に多様な影響を与えてきたことによる。こうしたチベット語訳『般若心経』だけに見られる独自で錯綜したカンギュル伝承系譜を図式化しながら、著者シルクは、「密教部」のH₁; L₂; M₂; N₂; R₂; B; C; F; J; K; P; D₂; U₂のグループに Recension A、そして「般若部」のH₁; L₁; M₁; N₁; R₁のグループに Recension B とそれぞれ命名し、整理した。この作業の意図するところは、単なる校訂テキストの作成と提供を超えて、チベット語訳『般若心経』各テキスト間の伝承系統および相互の親縁・影響関係を辿り明らかにすることにある。さらに著者の意図する究極には、各カンギュルの成立史の確定およびインド仏教経典のチベット語への翻訳史の究明に役立てようとするものがあつた。厳密で正確な文献批判に基づく校訂テキストを基盤にすることなくしては、高度な思想研究も望むことはできない。『般若心経』の場合も、チベット翻訳僧が一番始めに作成したチベット語訳をその翻訳僧の意図に忠実な形にまでオリジナル復元することは重要な作業

である。しかし仏教經典とは、元來が著者を持たない匿名性の高い文献であり、常に複数の伝達者が介在し、しかもチベットで翻訳がなされる前の段階で既に長年月が経過し、インド語の原典がそれ自体の recensions とその発展の歴史を抱えている特異な古典文献である。口頭で伝承された期間も存在した可能性もある。このような歴史的経過を持つインド語原典の一つのヴァージョンに対してチベットの地においてさらに複数回の翻訳が試みられた場合、または編纂の過程で全体的訳語統一などの強制が中途で加えられた場合、大蔵經編纂者や写經生による意図的・恣意的あるいは単純な不注意による編集・改変・改竄がなされた場合、等々を考えると、文献批判に基づく校訂テキスト作成といっても、現実にはかつて実際にはどの時代・どの地にも決して存在したことの無い怪物テキストを作り出す危険が存する。

この状況を著者は「一つのありえたシナリオ」ということばで、次のように叙述している。「サンスクリット語なり、他のインド語で書かれた、あるいは口頭で伝えられた、ある一つの文献が、チベット語への翻訳者たちのチームの手に入った。これをテキスト S^i と呼ぶこととしよう。 S^i をなぞるように忠実にチベット語に置き換えた。これを T^i と呼ぶこととしよう。この T^i はチベットに流布して書写が何回もされた。これによって勿論ある程度の書き換えが生じたかもしれないが、おそらく大きな改変ではなかったであろう。しかし、 T^i を入手した読者の内には、インドの原典の別のコピー S^a を手に入れた人があったかもしれない。この人の S^a 版は S^i と同一であることもあるだろうし、まったく異なった版であることもありうるだろう。この人は S^a を T^i と比べて見るであろう。そして S^a が S^i と全く同じであった場合でも、元の翻訳者のいくつかの翻訳箇所については意見を異にして部分的に翻訳を書き直すことがあるであろう。もし S^a が S^i と異なったものである場合には、比較した上でチベット語訳が変わってくることは当然あり得ることである。この人が新しく訂正し直した T^a が流布しだすと、一つの同一の文献について二系統の伝承校訂版 (recensions) の始めができたことになる。一つの經典についてこのような経過が何度繰り返されたかは述べることができない。改訂訳にはさらに改訂が加えられる。最初の翻訳にはこのような読者によって、あるいは複数の読者によって、数多くの改訂が加えられた。われわれの入手している原テキストがどのように良質のもので、われわれの文献批判研究に関する理論的理解がいかによくできていようと、また文献批判をいかによく実行しようとも、このような状況下にあっては、 S (インド語原本テキスト) の原型 (archetype) を再構築することは不可能であるといえることができる。」(13ページ)

このような状況に十分配慮した注意深い認識の上に立って、著者は、「一

つの「役に立つ」諸版の伝承関係系譜 (to establish a “serviceable” stemmatic relationship) を確定する」ことが現実的に望みうる最大のもくろみであるとして提案する。そして、そのための実践として、すべてのヴァリアント（異読・異文）を、チベット語の句点 (shad) や読点 (tsheg) の有無・異同を含めて、一切を克明に記録する。經典目録に「複本」との記載がある場合も、すべてのヴァリアントを実際に「複本」にあたってチェックして記録する。インド語のチベット文字への転音写はすべてそのままに記録する。同音異語変換や省略字、さらには単純な誤字・写誤をふくめてすべて記載する。これに加えて、注釈文献における引用と釈義解釈や綴字方法を記録する。奥書の記載を記録する。梵・藏・漢・蒙・満語の多言語合璧版『般若心経』テキストやチベット「街版」と呼ばれる流布本の記載を検討する。こうして『般若心経』チベット語訳テキストをAからYまでの25のパラグラフに細かく分割して、それぞれに対して以上の作業を徹底して行ない検討することによって、原テキストから伝播過程に付随して生じた (transmissional) 第二義的な改変を振るい落として、系統的 (recensional) な校訂プロセスを見つけたし、改訂が重ねて加えられる前のオリジナルに遡らさせる努力を放棄しない。

著者シルクの最大功績と本研究の利点は、以上の作業をチベット語訳『般若心経』テキストにおいて、現時点において可能な最大限にまで実践し、実際に試みた点にある。勿論、本研究の不十分な面を指摘することは容易であろう。とくに敦煌出土の膨大な数のチベット語訳『般若心経』大本・小本の存在の検討が（言及されながらも）今後に残されたままの分析は、伝承経緯の究明にとっての不可欠な重大課題が先延ばしになっていると指摘せざるをえない。また Phug brag 写本 (S) の性格づけがなされないで恣意性を残した (arbitrary) 形でのA・Bの分類も説得力を減じている。さらにハリソン教授の『大樹緊那羅王所問經』テキスト研究における Recension A と本研究における Recension A が同一視点に基づく分類概念なのか否かの言及も望まれる。以上、今後に求められる点は多々存するが、しかし本研究で試みられた同様の手法と作業レベルが、著者の学位論文研究テーマである『寶積經』その他において結実し、刊行される時には、インド大乘仏教經典のチベット語訳成立史の解明に測り知れない貢献となろうことが予測されるのである。

般若思想の専門研究者エドワード・コンゼ教授が1979年に逝去されたが、生前に同教授の記念出版が刊行されて以後 (Lewis Lancaster ed.: *Prajñāparamitā and Related Systems, Studies in honor of Edward Conze*, Berkeley Buddhist Studies Series, 1977)、近年の欧米において般

若經の研究、その中でも『般若心經』に関する研究の進展がめざましい。これらの諸研究が、一つには福井文雅：『般若心經の歴史的研究』（春秋社、1987）の成果刊行に触発された点が多々あることは、いずれの脚注にも同書が言及・引用されていることから明らかであることを付記しておきたい。以下にコンゼ教授の業績を含めて主なものを列記してみよう。

Edward Conze: “Text, Sources, and Bibliography of the *Prajñāpāramitā-hṛdaya*”, *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1948, pp. 33-51.

Edward Conze: *The Prajñāparamitā Literature*, (the Reiyuka, Tokyo, 1978).

Malcolm David Eckel: “Indian Commentaries on the *Heart Sūtra*: The Politics of Interpretation”, *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 10, No. 2, (Bloomington, 1987), pp. 69-79.

John R. McRae: “Ch’an Commentaries on the *Heart Sūtra*: Preliminary Inferences on the Permutation of Chinese Buddhism”, *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 11, No. 2, (Bloomington, 1988), pp. 87-115.

Donald S. Lopez, Jr.: *The Heart Sūtra Explained: Indian and Tibetan Commentaries*, (State University of N.Y., 1988).

Donald S. Lopez, Jr.: “Inscribing the Bodhisattva’s Speech: On the *Heart Sūtra*’s Mantra”, *History of Religions*, Vol. 29 (Chicago, 1990), pp. 351-372.

Jan Nattier: “The *Heart Sūtra*: A Chinese Apocryphal Text?”, *The Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 15, No. 2 (1992), pp. 153-223.

Jan Nattier: “Church Language and Vernacular Language in Central Asian Buddhism”, *Numen*, Vol. XXXVII, Fasc. 2, pp. 195-219.

これらの研究者はいずれも梵語・チベット語・中国語・日本語等のアジア諸言語に堪能な、行動的でそれぞれの現地での知識収集能力に長けた若手の学者である。インタビューや討議・情報交換のやりとりで電子通信手段をフルに活用しての研究手法も今後一つの時代を画するものとなることが予想される。研究姿勢は各時点においてきわめて動的な進行形であり、成果発表もテンタティブな形を取っている。それだけにどこまでが自分自身の責任ある業績提示なのか、自他の知識領域が不分明になる怖れがある。情報源の確認と学的な再検証が求められる場合も少なくない。このような新らしい研究者たちの旗手として、チベット語訳『般若心經』の文献研究を徹底しておこなった、みずから perfectionist を自認する本書の著者 Jonathan A. Silk

の今後の研究の進展を、期待を持って見守りたい。(なお本書の文中の Hariba が、「榛葉 (しんぱ)」であることは、『白石真道仏教学論文集』515ページから確認できるので、乞訂正。)

Jonathan A. Silk: *The Heart Sūtra in Tibetan: A Critical Edition of the Two Recensions Contained in the Kanjur*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 34 (Wien, 1994).